湖東焼

1829 年に彦根地域で生まれた陶磁器の湖東焼は、優雅で高品質な磁器として知られている。湖東という名前は「湖の東」を意味し、琵琶湖と彦根の位置関係を表しているが、湖東焼はその希少性と品質から「幻の」陶器と呼ばれることもある。この陶磁器の様式は青磁もしくは金箔、中国式の青と白で塗装されているという特徴がある。
最初は 1829 年に呉服商人によって開発され、1842 年に湖東焼の生産は、中国製品を収集し、芸術に対する鋭い目を持っていたと言われる井伊直亮（1794–1850）によって援助され藩直営となった。湖東焼は日本の伝統芸術のプロモーションのために井伊家が行った多くの貢献の代表例の 1 つであった。湖東焼の様式の発展は、1850 年に井伊家の長となった井伊直弼（1815–1860）の功績に大きく帰するもので、湖東焼の生産と品質を上げるために多大な時間を費やした。直弼は生産量を増加させ、師匠クラスの職人を彦根に招き湖東焼の品質を高めた。彼が井伊家の長として君臨した約 10 年間は湖東焼の黄金時代と考えられている。
14 番目の男子として生まれた直弼が一族の長となって井伊家の後継者になることはほとんど期待されず、彼は青年時代を隠居生活者のように過ごした。しかし、直弼より年上の 13 人の兄弟は先に死んだり、他家へ婿養子に入ったりしていたので、直弼は藩主の地位を得ることができたのである。湖東焼は彼の支援の下で栄えたが、1860 年の彼の暗殺後、井伊家は衰退し、湖東焼の生産は 1895 年に終わりを遂げた。